

原著

青年用主観的ウェルビーイング指標 (AI-SWB) の妥当性検討

鈴木有美*

Validation of the Adolescents' Index of Subjective Well-Being (AI-SWB)

Yumi Suzuki*

Validation of the Adolescents' Index of Subjective Well-Being (AI-SWB)

Abstract

In recent studies of positive psychology, subjective well-being has been conceptualized as consisting of two major components: the cognitive component (life satisfaction) and the affective component (emotional experience). The present study was designed to validate the Adolescents' Index of Subjective Well-Being (AI-SWB; Suzuki, 2009), a multidimensional measure of adolescents' subjective well-being that could distinctively assess global life satisfaction, satisfaction with important domains (school life, friendships, family), positive affect, and negative affect. The AI-SWB was administered to a sample of 1431 undergraduates, and correlational analyses showed that the AI-SWB subscales displayed a predictable pattern of relationships with the existing well-being scales and the Big Five dimensions of personality. These findings, coupled with the theoretically important relationships existing among the AI-SWB subscales themselves, suggested that the AI-SWB could prove to be a valid and reliable measure of well-being in adolescence, suited for research in applied settings.

Key Words : subjective well-being, multidimensional scale, validity, mental health, personality

問題と目的

近年、国民生活における豊かさの指標として、従来の国内総生産 (GDP) に加えて幸福度が注目されつつある。この傾向は、欧州、北米、オセアニア、そしてアジアの先進諸国にみられる国際的動向である。特に日本では、相対的に経済的な豊かさに比して主観的幸福感の低さが際立つことから、政策的な観点からも幸福度に関する研究を進めることが課題となっている (内閣府, 2011)。心理学分野でも、過去半世紀の間に主観的幸福感 (Subjective Well-Being: 以下、本論文では“主観的ウェルビーイング”と称する¹⁾) に関する議論が

進んでいる (例えば, Diener, 1984; Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999)。

主観的ウェルビーイングは、かつては快感情を多く経験したか、あるいは不安・抑鬱傾向がないか (不快感情を経験していないか) という視点のみによって検討されることも多かった。しかし現在では、“個人生活の自分自身の評価”という定義が定着し、認知的側面の“全体的な生活満足感”と“特定の重要な領域における満足感”, 情緒的側面の“快感情経験の多さ”と“不快感情経験の少なさ”の4つの基本的要素からなる概念であるとの見解が多くの研究者の一致したところとなっている (鈴木, 2009参照)。なお、特定の重要な領

* 福岡女子大学 (Fukuoka Women's University)
受領 2013.11.13 受理 2015.6.14

域における満足感とは、各個人の満足感に大きく影響する中心的な領域を指す。鈴木は学校に通う青年（中学生，高校生，大学生）にとって重要な意味を持つ領域として、学業領域（学校生活）および対人領域（友人関係，家族関係）を提案しているが、社会人なら勤労生活，既婚者なら結婚生活が挙げられるなど、その個人の生活環境によって若干異なるものである。

最近の日本における国民生活選好度調査では、青年の幸福度は成人や高齢者に比べて高く、また、学生であることは幸福度にプラスの影響を及ぼす要因であるといった結果が出ている（内閣府，2008）。しかしながら、無論これは学校に通う青年の精神的健康に問題がないことを意味するものではない。事実、高等教育機関における学生相談機関に寄せられる相談件数は全国的に増加し続けており、相談内容も勉強・進路が減少傾向にあるのに対して、心理・適応が増加傾向にあるとの調査報告もある（吉武・大島・池田・高野・山中・杉江・岩田・福盛・岡，2010）。従来のように、精神的問題を抱える学生に対する治療的教育相談に向けて精神的健康の否定的側面（精神的に不健康である程度）に関する研究を進めることも重要であるが、一方で健康な心的機能の維持や才能・資質を伸ばすといった予防的・開発的教育相談に向けて精神的健康の肯定的側面（精神的に健康である程度）に関する知見を蓄積していくことも同様に重要であろうと考えられる。

Seligman & Csikszentmihalyi (2000) は、これまでの心理学研究が損なわれた心的機能の治療という観点からネガティブな病理的側面に偏りすぎていたことを指摘し、ポジティブな特性や認知、社会的活動などに焦点を当てる必要性を提言した。このポジティブ心理学の提唱以降、ヒューマン・ケアに関する研究領域でも急速にこの偏りを是正する方向で研究が進んでいる。例えば、Lopez, Snyder, & Rasmussen (2003) は、ケア従

事者にポジティブ心理学的アセスメントを取り入れた実践モデルを提案している。全ての人々は自身の生活の質を向上させることができるような強みや資源を持っているため、ケア従事者はクライアントの問題や障害のみに着目するのではなく、同時に強みや資源にも目を向け、心理的機能について偏りのない、バランスのとれた実践をすべきだという。同様に、Wright & Lopez (2009) も包括的な視点からクライアントを把握する重要性に触れ、治療の経過ノートをとったり報告書を書いたりする際、臨床的な意見や介入提案を記述するのと同量のスペースと時間を割いてクライアントの強みや資源に言及すべきだと主張する。クライアントの変化を促すために強みや資源をどのように利用できるか議論することは、効果的な支援を目指すケア従事者にとっても、積極的な自助努力が求められるクライアント自身にとっても、貴重な示唆となる可能性をもつ。ポジティブ心理学の研究や実践では、一次評価として質問紙によるデータ収集がよく行われるが (Lopez et al., 2003), 十分な信頼性と妥当性を備えた尺度を用いることが肝要であろう。

主観的ウェルビーイングは、その広範な概念ゆえに様々な分野で様々な尺度を用いて検討されてきた (Diener, 1984; Diener et al., 1999; 根建・田上, 1995)。本研究で用いる青年用主観的ウェルビーイング指標 (Adolescents' Index of Subjective Well-Being: AI-SWB) は、鈴木 (2009) がそれら測定上の問題点を概観し、学校に通う生徒・学生を対象に主観的ウェルビーイングを認知および情緒の両面から包括的に測定するため作成した尺度である。AI-SWB の各下位尺度と尺度全体の構成については、内的整合性と安定性の観点から満足な信頼性が得られている。しかし妥当性に関しては、中学生，高校生，大学生のデータで因子構造が等質であるという因子の妥当性以外は触れられておらず、さらなる妥当性の検討が課題であると言わ

ざるを得ない。そこで本研究では、AISWBと既存の精神的健康指標および5因子性格検査との関連から、AISWBの妥当性について検討を進めることを目的とする。

主観的ウェルビーイングの認知面の“全体的な生活満足感”について、これまで測定に最も利用されてきたのはDiener, Emmons, Larson, & Griffin (1985)が作成した生活満足感尺度(Satisfaction With Life Scale: SWLS)であろう。また、日本でも伊藤・相良・池田・川浦(2003)が主観的幸福感尺度(Subjective Well-Being Scale: SWBS)を作成している。これらの尺度は、AISWBの“全般的な生活満足感”下位尺度と正の相関関係が予想される。認知面のもう一つの構成要素である“特定の重要な領域における満足感”については、AISWB以外に青年期における主観的ウェルビーイング研究の枠組みで作成された尺度は現在のところ見当たらない。そこで本研究では、AISWBが想定する各領域の満足感や適応感を測定する既存尺度を採用することとし、AISWBの当該満足感および快感情経験と正に相関し、不快感情経験とは負に相関すると予想して調査を行う。

主観的ウェルビーイングの情緒面の“快感情経験の多さ”および“不快感情経験の少なさ”については、これまで快・不快感情尺度(Positive and Negative Affect Scale: PANAS; Watson, Clark, & Tellegen, 1988)や感情を表す形容詞リスト(Diener & Emmons, 1984)などが広く利用されてきた。日本では、主観的ウェルビーイング研究に焦点を当てたものではないが、PANASと同じく全体的な感情状態の測定を目的として作成された一般感情尺度(小川・門地・菊谷・鈴木, 2000)が存在する。AISWBの感情経験下位尺度は、学業、友人関係、家族関係それぞれの場面での感情経験をたずねるものとなっているものの、快感情経験の各下位尺度は一般感情尺度の“肯定的感情”と、

不快感情経験の各下位尺度は一般感情尺度の“否定的感情”と、それぞれ正に相関すると予想される。また、一般感情尺度にはもう一つ“安静状態”と命名された下位尺度が存在するが、これはAISWBの感情経験を測定するいずれの下位尺度とも関連しないことが予想される。

本研究では、精神的健康の否定的側面としてディストレス傾向(Goldberg, 1972)および絶望感(Beck, 1963)を取り上げ、AISWBとの関連を検討する。これまでの研究からは、精神および身体的なディストレス傾向が強い者ほど全体的な生活満足感が低く(Arrindell, Meeuwesen, & Huyse, 1991)、不快感情経験が多く、快感情経験が少ない(Watson et al., 1988)ことが明らかとなっている。絶望感との関連についても、同様の結果が報告されている(Lucas, Diener, & Suh, 1996)。なお、絶望感は抑鬱の中核症状とされているが、主観的ウェルビーイングと不安傾向や抑鬱傾向との関連についての知見は比較的多く、これもまた負の相関関係にあることが知られている(Diener et al., 1999; Lucas et al., 1996; Pavot & Diener, 1993; Watson et al., 1988)。したがって、AISWBがディストレス傾向および絶望感の測度と負の関連を示すことは、構成概念の妥当性を示す証拠となりうるものと考えられる。

加えて、本研究では性格特性も取り上げる。欧米では、性格特性が主観的ウェルビーイングの最も強力な予測因の一つであると広く知られているが(Diener & Lucas, 1999)、日本では研究がほとんど進んでいない。主観的ウェルビーイングと性格特性の関連について、これまでの知見をメタ分析した研究(例えば、DeNeve & Cooper, 1998; Steel, Schmidt, & Shultz, 2008)からは、5因子性格の開放性(遊戯性)を除いて主観的ウェルビーイングと関連することが明らかとなっている²。特に、快感情と外向性および調和性(愛着性)と正の相関、不快感情と神経症傾向(情動性)と正の相

関、および全体的な生活満足感と神経症傾向（情動性）との負の相関関係が顕著である。これらの関連が AI-SWB との間にも見出されれば、AI-SWB の妥当性検討の一助となろう。

方法

調査対象・手続き

愛知県内の7つの四年制大学に通う1年生から4年生までの学生に対して、2008年5月から2011年1月の間に6回にわたり質問紙調査を実施した。内訳は、1回目調査174名（男110名、女64名； $M = 19.82$ 歳、 $SD = 1.08$ ）、2回目調査210名（男119名、女91名； $M = 19.75$ 歳、 $SD = 1.05$ ）、3回目調査275名（男93名、女182名； $M = 18.85$ 歳、 $SD = 1.13$ ）、4回目調査254名（男150名、女104名； $M = 19.59$ 歳、 $SD = 1.08$ ）、5回目調査254名（男130名、女124名； $M = 19.97$ 歳、 $SD = 1.14$ ）、6回目調査264名（男149名、女115名； $M = 18.95$ 歳、 $SD = 0.99$ ）であった。

倫理的配慮として、調査目的は一般的傾向を研究するために行うものであること、データは統計的に処理されるため個人の回答が特定されることはない旨を調査用紙の表紙に明記し、配付する際に調査結果を研究目的以外に使用しないこと、自由意志による参加のため非協力による不利益を一切被らないことを口頭で伝え、無記名式で回答を求めた。調査用紙は講義時間内に配付・回収され、回答のみを各々が自宅で行った。

調査内容

本論文で分析対象とした測度のみ以下に記載する。AI-SWB は6回全ての調査において実施し、その他は全6回のうちいずれかの調査において実施した³。

1. AI-SWB（鈴木，2009）：主観的ウェルビーイングの認知面を測定する生活満足感尺度と、情緒面

を測定する感情経験尺度から構成される。生活満足感尺度は“全般的な生活満足感”“学校生活満足感”“友人関係満足感”“家族関係満足感”各6項目、5件法。感情経験尺度は、過去3ヵ月間の学業・友人関係・家族関係の3領域における“快感情”“不快感情”の経験をたずねる各6項目、5件法。

2. SWLS（Diener et al., 1985）：主観的ウェルビーイングの認知的側面の一部である全般的な生活満足感を測定する5項目、5件法。なお、SWLSの日本語版は、角野（1994）が作成した版や Diener 自身がイリノイ大学の HP 上で公開している2種類の版など複数存在するものの、本研究では原典の英語版から back translation を経て、欧米で学位を取得した日本人心理学者2名および日本に留学経験のあるアメリカ人大学院生が協議の上、日本語表現を整えて作成した日本語版を採用した。これは、本研究にあたり、上述の4つの翻訳版の比較検討を英語およびドイツ語に堪能な研究者に依頼したところ、本研究で採用した版が英語原版およびドイツ語版に最も翻訳が近く、内容的妥当性が高いとの回答を得たことによる。また、本データで因子分析（主成分分解）を行ったところ、原版と同じ1因子が抽出され、初期の固有値は2.62、寄与率は52.43%、共通性は項目1から順に .68, .54, .65, .44, .31であったことから、因子の妥当性も確認された。後述のように、 $\alpha = .77$ （Table 1参照）という信頼性も示されており、本尺度を用いて分析を進めることに問題はないと判断した。

3. SWBS（伊藤他，2003）達成感、自信、至福感、失望感といった心理的健康度を測定する15項目、4件法。

4. 精神健康調査票-12項目版（General Health Questionnaire-12: GHQ-12; 福西，1990）精神的および身体的なディストレス傾向を測定する12項目、4件法⁴。

5. 絶望感尺度（Beck Hopelessness Scale: BHS;

Beck, Weissman, Lester, & Trexler, 1974; Tanaka, Sakamoto, Ono, Fujihara, & Kitamura, 1998) 将来に対する悲観的な態度を測定する20項目, 2件法。

6. 一般感情尺度(小川他, 2000): 過去1週間の“肯定的感情”“否定的感情”“安静状態”各8項目から構成される。4件法。

7. 青年用適応感尺度(大久保, 2005; 以下, 本論文では学校適応感尺度と称する): 学校における“居心地の良さの感覚”11項目, “課題・目的の存在”7項目, “被信頼・受容感”6項目, “劣等感の無さ”6項目から構成される。5件法。

8. 友人関係の感情的側面を測定する尺度(榎本, 1999; 以下, 本論文では友人関係感情尺度と称する): 友人に対する“信頼・安定”8項目, “不安・懸念”7項目, “独立”3項目, “ライバル意識”3項目, “葛藤”4項目から構成される。6件法。

9. 家族システムの円環モデルに基づく尺度(Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales, 3rd version: FACES III; 黒川, 1990): 家族満足度を測定する尺度と, 親と青年期の子どものコミュニケーションを測定する尺度から構成される。家族満足度は, 家族関係の凝集性および適応性を測定する13項目, 6件法。親子のコミュニケーションは“率直な家族コミュニケーション”および“拒否的な家族コミュニケーション”各10項目, 5件法。

10. 5因子性格検査短縮版(Five Factor Personality Questionnaire-50: FFPQ-50; 藤島・山田・辻, 2005): 基本的な性格特性の“情動性”“外向性”“統制性”“愛着性”“遊戯性”各10項目から構成される。5件法。

を採用した⁵。内的整合性の観点から各尺度の信頼性を検討したところ, $\alpha = .71-.93$ であったため, ここで算出した尺度得点を今後の分析に用いることとした。各尺度得点の平均値, 標準偏差, α 係数(2件法のBHSについてはKR20係数)をTable 1に示す。

Table 1 各尺度得点の基礎統計量

	M	SD	α	N
主観的ウェルビーイング(AI-SWB) ^{a~f}				
生活満足感 全般	21.00	4.98	.85	1040
学校生活	20.72	4.22	.77	1042
友人関係	23.11	3.86	.78	1040
家族関係	23.42	4.86	.87	1041
快感情 学業	16.29	4.63	.86	1017
友人関係	23.53	4.66	.91	1009
家族関係	20.30	5.44	.91	979
不快感情 学業	19.20	4.77	.77	1016
友人関係	15.26	5.12	.86	1017
家族関係	14.95	5.28	.84	987
生活満足感(SWLS) ^a	12.74	3.72	.77	174
主観的幸福感(SWBS) ^c	40.73	5.89	.83	242
ディストレス傾向(GHQ-12) ^b	28.20	6.34	.84	208
絶望感(BHS) ^c	7.63	3.93	.83	237
一般感情 ^f				
肯定的感情	23.81	4.63	.85	261
否定的感情	19.66	5.22	.83	264
安静状態	21.28	5.39	.88	262
学校適応感 ^d				
居心地の良さの感覚	38.06	8.14	.93	251
課題・目的の存在	25.56	5.09	.86	252
被信頼・受容感	17.20	4.23	.87	251
劣等感の無さ	20.37	4.30	.80	253
友人関係感情 ^e				
信頼・安定	32.14	5.09	.81	252
不安・懸念	22.45	6.01	.83	253
独立	12.84	2.36	.73	254
ライバル意識	9.85	3.17	.66	254
葛藤	11.42	3.38	.71	251
家族システム(FACES III) ^e				
家族満足度	48.42	10.79	.87	247
率直なコミュニケーション	34.33	8.55	.92	252
拒否的なコミュニケーション	28.11	6.72	.77	252
5因子性格(FFPQ-50) ^e				
情動性	33.77	6.85	.80	273
外向性	31.22	7.11	.83	272
統制性	30.39	6.24	.79	271
愛着性	34.58	5.89	.80	272
遊戯性	35.62	5.89	.75	271

注) 信頼性係数は2件法のBHSのみKR20係数

a: 調査1, b: 調査2, c: 調査3, d: 調査4, e: 調査5, f: 調査6

結果

尺度構成

それぞれの尺度の構成は, 全て原典の尺度構成

尺度間の関連

各尺度得点の分布および尺度得点間の散布図において, 特に大きな偏りや外れ値がみられないことを確認し, 尺度間の関連について相関分析を

Table 2 AI-SWBの下位尺度間および他尺度との相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
主観的ウェルビーイング(AI-SWB)										
1. 生活満足感 全般										
2. 学校生活	.60 ***									
3. 友人関係	.54 ***	.49 ***								
4. 家族関係	.40 ***	.27 ***	.31 ***							
5. 快感情 学業	.32 ***	.42 ***	.11 ***	.10 **						
6. 友人関係	.52 ***	.47 ***	.69 ***	.27 ***	.26 ***					
7. 家族関係	.40 ***	.26 ***	.30 ***	.70 ***	.23 ***	.43 ***				
8. 不快感情 学業	-.23 ***	-.24 ***	-.13 ***	-.12 ***	-.23 ***	.00	-.02			
9. 友人関係	-.26 ***	-.21 ***	-.43 ***	-.18 ***	.01	-.27 ***	-.08 *	.38 ***		
10. 家族関係	-.22 ***	-.09 **	-.19 ***	-.52 ***	.04	-.06 *	-.36 ***	.31 ***	.42 ***	
生活満足感(SWLS)	.63 ***	.43 ***	.27 ***	.35 ***						
主観的幸福感(SWBS)	.58 ***	.39 ***	.38 ***	.22 ***	.28 ***	.41 ***	.30 ***	-.19 **	-.30 ***	-.15 *
ディストレス傾向(GHQ-12)	-.48 ***	-.27 ***	-.15 *	-.23 ***						
絶望感(BHS)	-.47 ***	-.35 ***	-.34 ***	-.13 *	-.24 ***	-.34 ***	-.18 **	.15 *	.23 ***	.10
一般感情										
肯定的感情	.62 ***	.43 ***	.40 ***	.15 *	.31 ***	.48 ***	.28 ***	-.02	-.16 **	-.05
否定的感情	.05	.08	.02	.05	.07	.08	.08	.37 ***	.31 ***	.17 **
安静状態	-.01	-.04	-.13 *	-.04	.11	-.02	.16 **	-.06	-.06	-.10
学校適応感										
居心地の良さの感覚	.60 ***	.66 ***	.57 ***	.17 **	.31 ***	.57 ***	.25 ***	-.18 **	-.24 ***	-.10
課題・目的の存在	.51 ***	.72 ***	.39 ***	.29 ***	.44 ***	.50 ***	.29 ***	-.21 ***	-.15 *	-.08
被信頼・受容感	.44 ***	.49 ***	.24 ***	.14 *	.35 ***	.32 ***	.21 **	-.15 *	-.03	.02
劣等感の無さ	.45 ***	.37 ***	.40 ***	.32 ***	.22 ***	.38 ***	.23 ***	-.34 ***	-.38 ***	-.25 ***
友人関係感情										
信頼・安定	.33 ***	.33 ***	.63 ***	.22 ***	.11	.55 ***	.28 ***	-.05	-.22 ***	-.11
不安・懸念	-.18 **	-.05	-.17 **	-.14 *	-.03	-.09	-.05	.31 ***	.38 ***	.28 ***
独立	.20 **	.10	.17 **	.16 *	.04	.22 ***	.13 *	-.01	-.09	-.05
ライバル意識	-.01	-.02	-.03	.12	-.02	-.06	.05	.16 *	.14 *	.01
葛藤	-.17 **	-.03	-.30 ***	-.17 **	.04	-.14 *	-.05	.18 **	.28 ***	.24 ***
家族システム(FACESⅢ)										
家族満足度	.43 ***	.30 ***	.24 ***	.70 ***	.16 *	.30 ***	.66 ***	-.11	-.05	-.34 ***
率直のコミュニケーション	.46 ***	.30 ***	.30 ***	.75 ***	.06	.27 ***	.63 ***	-.10	-.11	-.46 ***
拒否的コミュニケーション	-.28 ***	-.14 *	-.22 ***	-.59 ***	.03	-.12	-.34 ***	.27 ***	.28 ***	.63 ***
5因子性格(FFPQ-50)										
情動性	-.50 ***	-.22 ***	-.26 ***	-.25 ***	-.20 **	-.21 ***	-.24 ***	.37 ***	.35 ***	.36 ***
外向性	.40 ***	.32 ***	.36 ***	.07	.14 *	.44 ***	.19 **	-.04	-.08	-.01
統制性	.22 ***	.20 **	.13 *	.19 **	.21 ***	.14 *	.15 *	-.20 ***	-.12 *	-.10
愛着性	.54 ***	.50 ***	.60 ***	.33 ***	.11	.52 ***	.29 ***	-.19 **	-.31 ***	-.16 *
遊戯性	.02	.10	.02	-.05	.17 **	.11	.00	.02	.05	.15 *

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

行った (Table 2)。

AI-SWB 下位尺度間の関連 AI-SWB の下位尺度間の関連については、生活満足感 ($r=.60-.27, p<.001$)、快感情 ($r=.43-.23, p<.001$)、不快感情 ($r=.42-.31, p<.001$) それぞれ全てに有意な正の相関関係がみられた。

特定領域における満足感と当該の感情経験との間には、学校生活満足感と学業における快感情および不快感情 (順に $r=.42, -.24, p<.001$)、友人関係における満足感と快感情および不快感情 (順に

$r=.69, -.43, p<.001$)、家族関係における満足感と快感情および不快感情 (順に $r=.70, -.52, p<.001$) 全てに有意な関連がみられた。

同一領域における快感情と不快感情の間には、学業、友人関係、家族関係全てに有意な負の相関関係がみられる一方 (順に $r=-.23, -.27, -.36, p<.001$)、ある領域における快感情と異なる領域における不快感情との間の相関係数に絶対値が .08 を超えるものはなく、無相関であるか、もしくはほとんど相関はみられなかった。

AI-SWB と他の精神的健康指標の関連 既存の精神的健康指標と AI-SWB の認知面の関連について、全般的な生活満足感（SWLS）および SWBS と正の（順に $r=.63, .58, p<.001$ ）、GHQ-12 および BHS と負の（順に $r=-.48, -.47, p<.001$ ）相関関係を示した。領域別の満足感についても、SWLS および SWBS と $r=.43-.22$ ($p<.001$)、GHQ-12 および BHS と $r=-.35$ ($p<.001$) $-.13$ ($p<.05$) と、やや弱いものの同様の関連がみられた。

既存の感情尺度と AI-SWB の情緒面の関連については、一般感情尺度の肯定的感情は AI-SWB 快感情と $r=.48-.28$ ($p<.001$) であった。否定的感情は AI-SWB 不快感情と $r=.37$ ($p<.001$) $-.17$ ($p<.01$) であり、やや弱いものの同様の関連がみられた。AI-SWB 快感情は一般感情尺度の否定的感情および安静状態とはほとんど関連せず ($r=-.02, ns-r=.16, p<.01$)、同様に AI-SWB 不快感情は肯定的感情および安静状態とはほとんど関連していなかった ($r=-.02, ns-r=.16, p<.01$)。

学校生活領域に関しては、学校適応感尺度の下位尺度は、学校生活満足感と $r=.72-.37$ ($p<.001$)、学業における快感情と $r=.44-.22$ ($p<.001$) であった。学業における不快感情は、劣等感の無さと $r=-.34$ ($p<.001$)、課題・目的の存在と $r=-.21$ ($p<.001$)、居心地の良さの感覚と $r=-.18$ ($p<.01$)、被信頼・受容感と $r=-.15$ ($p<.05$) であり、やや弱い関連がみられるものの全ての下位尺度と有意な相関関係を示した。

友人関係領域に関しては、友人関係満足感と友人関係感情尺度の信頼・安定 ($r=.63, p<.001$)、葛藤 ($r=-.30, p<.001$)、不安・懸念 ($r=-.17, p<.01$)、独立 ($r=.17, p<.01$) の間に有意な相関関係がみられたが、ライバル意識とは無相関であった ($r=-.03, ns$)。友人関係における快感情は信頼・安定および独立と正に（順に $r=.55, .22, p<.001$ ）、葛藤と負に ($r=-.14, p<.05$) 相関していた。友人関係における不快感情は不安・懸念 ($r=.38, p<.001$)、葛藤

($r=.28, p<.001$)、ライバル意識 ($r=.14, p<.05$) と正の、信頼・安定 ($r=-.22, p<.001$) と負の相関関係を示した。

家族関係領域に関しては、FACES III の家族満足度は家族関係における満足感および快感情と正に（順に $r=.70, .66, p<.001$ ）、不快感情と負に ($r=-.34, p<.001$) 相関していた。率直な家族コミュニケーションは家族関係満足感と $r=.75$ ($p<.001$)、家族関係における快感情と $r=.63$ ($p<.001$)、不快感情と $r=-.46$ ($p<.001$) であり、同様の関連がみられた。拒否的な家族コミュニケーションは家族関係における満足感および快感情と負の（順に $r=-.59, -.34, p<.001$ ）、不快感情と正の ($r=.63, p<.001$) 相関関係を示した。

AI-SWB と5因子性格検査の関連 先行研究から関連すると予想された快感情と外向性は $r=.44$ ($p<.001$) $-.14$ ($p<.05$)、不快感情と情動性は $r=.37-.35$ ($p<.001$)、全般的な生活満足感と情動性は $r=-.50$ ($p<.001$) であり、全てに有意な関連がみられた。関連しないと予想された遊戯性とは、AI-SWB いずれの下位尺度も無相関 ($r=-.05-.11, ns$) あるいは無相関とみなせる程度の関連しか示さなかった ($r=.15, p<.05-r=.17, p<.01$)。

特定領域における満足感については、情動性は全ての領域別満足感と負の相関関係を示し ($r=-.26-.22, p<.001$)、外向性は学校生活満足感および友人関係満足感と（順に $r=.32, .36, p<.001$ ）、統制性は学校生活満足感および家族関係満足感と（順に $r=.20, .19, p<.01$ ）、愛着性は友人関係満足感や家族関係満足感とだけでなく、学校生活満足感とも正の相関関係を示した ($r=.33-.60, p<.001$)。

考察

本研究では、学校に通う青年の主観的ウェルビーイングを認知的／情緒的両側面から捉えらた

め開発された AISWB の妥当性について、既存尺度、関連が予想される概念の尺度、および5因子性格検査との関連から検討を行った。

AISWB の下位尺度間の関連については、主観的ウェルビーイング概念を構成する特定領域における満足感の下位尺度間、快感情経験の下位尺度間、不快感情経験の下位尺度間それぞれに正の相関関係が認められること、また、全体的な生活満足感と特定領域における満足感の各下位尺度との間、特定領域における満足感と当該の快感情経験との間にはそれぞれ正の関連がみられ、特定領域における満足感と当該の不快感情経験との間には負の関連がみられることなど、想定されている概念構成通りの結果が得られた。加えて、全般的な生活満足感が学校生活満足感や友人関係における快感情経験とやや強い関連を示すなど、鈴木(2009)に整合的な結果が本研究でも得られており、物理的のみならず心理的にも大学生活が生活の中心であること、また、友人との間で嬉しい、楽しいといった気持ちを多く感じられることが生活全体の満足感に大きく関係することがうかがえる。

既存の主観的ウェルビーイングに関わる指標との関連については、認知面においても情緒面においても予想通りの関連が認められた。AISWB の全般的な生活満足感、同じく主観的ウェルビーイング概念の全般的な生活満足感を測定するとされる SWLS や SWBS とやや強い関連を示していた(特定領域における満足感については、領域ごとに後述する)。情緒面についても、既存の一般感情尺度と同じ感情評価値ごとに有意な相関関係が認められる一方、安静状態とはいずれもほぼ無相関であるなど、これらは AISWB の妥当性をおおよそ支持する結果と考えられる。ただし情緒面については、それほど強い関連がみられたとは言い難い。例えば Watson et al. (1988) は、PANAS の妥当性検討において先行研究で使用された複数の感情形容詞リストとの間の高い相関関係(.76か

ら .92) を報告している。本研究の結果が、AISWB では感情経験を領域別に測定しているためか、期間の設定が異なるためか(AISWB では過去3か月に対して一般感情尺度では過去1週間)、何か他の要因によるものなのか明らかではなく、今後の検討課題といえる。

学校生活領域については、AISWB の学校生活満足感、学校適応感尺度のいずれの下位尺度とも有意な関連が認められた。特に、課題や目的があることによる充実感を測定する“課題・目的の存在”と強い関連を示し、この下位尺度が AISWB の学業における快感情経験ともやや強い関連を示したことは、妥当性を支持する結果と考えられる。不快感情経験については、強い関連はみられなかったものの、周囲との関係から生じる劣等感(の欠如)を測定する“劣等感の無さ”と負の関連を示したことは納得のいくものである。

友人関係領域については、AISWB の友人関係満足感が友人関係感情尺度の友人を信頼し、かつ安定した関係であるという肯定感を測定する“信頼・安定”と正の関連を示すとともに、友人との間で自己が確立していない程度を測定する“葛藤”とは負の関連を示した。AISWB の友人関係における快感情経験も“信頼・安定”と関連しており、また、不快感情経験は友人との関係性を意識するがゆえに生じる不安感を測定する“不安・懸念”との関連が認められた。親からの自立という発達課題をもつ青年期に、友人関係が重要性を増すことはよく知られている。榎本(1999)は、他者との関係性に埋め込まれた存在として自己を捉える相互協調的自己観(Markus & Kitayama, 1991)をもつ日本では特に、友人に肯定的受容を望むがゆえに不安や懸念が生じると述べている。しかしながら、日本人にとっての相互協調性はあくまで文化的に共有されている(すなわち周囲が望むと考えている)信念であり、相互協調的自己観の対概念である相互独立的自己観をより理想と

して捉えていることを示した研究(橋本, 2011)もある。これらの点を考慮して今回の結果を解釈すれば、友人に対して信頼し合い、理解し合っていると感じられる肯定感をもつことはもちろん、意見が違おうとって不安になったり、内心困っているのに自分を抑えて我慢したりといった葛藤を抱えない、すなわちしっかりした自己をもち、友人の前で自分らしく振る舞えることも、大学生の主観的ウェルビーイングの維持・向上にとって重要であろうと推察される。

家族関係領域については、AI-SWBの家族関係における満足感も感情経験もFACESⅢのいずれの下位尺度とも有意な関連を示した。システム論を始めとする家族研究の発展に伴い、多くの臨床場面で家族関係を通して個人の不適応問題が理解されるようになってきたといわれる(貞木・榎野・岡田, 1992)。本研究の結果もこれを支持するものであり、家族の情緒的なつながりや、家族の問題対処能力を評価するほど、そして親とのコミュニケーションにおいて率直であり、拒否的な態度をとらないほど、大学生の主観的ウェルビーイングが高いことが確認された。

本研究では、精神的健康のネガティブな側面を測定する尺度との関連についても検討を行った。その結果、精神的および身体的なディストレス傾向を測定するGHQ-12や、将来に対する悲観的な態度を測定するBHSの得点の高い者ほど、AI-SWBの全般的な生活満足感が低くなる傾向がみられた。また、BHSは学校生活や友人関係における満足感や快感情経験とも負の関連を示しており、これらの結果はAI-SWBの妥当性を概ね支持するものと考えられる。家族領域においては関連がみられなかったが、これは本研究の対象が大学生であったことから、精神的・経済的な自立を考える者が少なからず存在し、家族間で不快な思いをしても直ちに将来への悲観につながるわけではないためと推察される。

5因子性格検査との関連については、情動性が全体的な生活満足感と負に、不快感情経験とは正に関連するという予想通りの結果が得られた。快感情経験と外向性および愛着性との関連については、友人関係領域においてのみ有意な正の相関関係が認められた。特定領域における満足感については、外向性と学校生活や友人関係における満足感との間の正の相関関係、愛着性と学校生活、友人関係、家族関係全てにおける満足感との間の正の相関関係が有意であった。なお、遊戯性はAI-SWBのいずれの下位尺度とも関連がみられなかった。これまでの研究の知見から、情動性が否定的な情緒の、外向性が肯定的な情緒の最大規定因となること、統制性が達成場面において、愛着性が対人場面において成功経験の可能性を高め、それぞれの領域における満足感につながることで、遊戯性は主観的ウェルビーイングにほとんど関連しないことなどが共通認識となりつつある(DeNeve & Cooper, 1998; McCrae & Costa, 1991; Steel et al., 2008)。本研究において同様の結果が得られたことは、AI-SWBの妥当性を支持するものと考えられる。

以上により、AI-SWBは概ね満足度のいくつかが妥当性が確認され、大学生の主観的ウェルビーイングを多面的に理解する上で役立つと考えられる。今後は、臨床的な使用も推奨されているSWLS同様、臨床場面での知見を蓄積することで、ヒューマン・ケア領域における有益性を高められるのではないだろうか。Pavot & Diener (1993)は、心理療法の効果が抑鬱や不安傾向の指標でみられず、SWLSでのみ認められたいくつかの事例を報告している。AI-SWBは青年を対象としているため、教育機関の相談室等での積極的な利用が望まれる。なお、今後も他者評定や行動観察、生理的指標など自己報告以外の手法を用いてAI-SWBの妥当性を発展的に検討するとともに、現代青年のウェルビーイングを多角的に捉えていく努力が求

められることは言うまでもない。

引用文献

- Arrindell, W. A., Meeuwesen, L., & Huyse, F. J. (1991). The Satisfaction With Life Scale (SWLS): Psychometric properties in a non-psychiatric medical outpatients sample. *Personality and Individual Differences*, **12**, 117-123.
- Beck, A. T. (1963). Thinking and depression. *Archives of General Psychiatry*, **9**, 324-333.
- Beck, A. T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L. (1974). The measurement of pessimism: The Hopelessness Scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 861-865.
- Costa, P. T., & McCrae, R. R. (1992). *Revised NEO Personality Inventory (NEO PI-R) and NEO Five-Factor Inventory professional manual*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- DeNeve, K. M., & Cooper, H. (1998). The happy personality: A meta-analysis of 137 personality traits and subjective well-being. *Psychological Bulletin*, **124**, 197-229.
- Diener, E. (1984). Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, **95**, 542-575.
- Diener, E., & Emmons, R. A. (1984). The independence of positive and negative affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 1105-1117.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larson, R. J., & Griffin, S. (1985). The Satisfaction With Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 71-75.
- Diener, E., & Lucas, R. E. (1999). Personality and subjective well-being. In D. Kahneman, E. Diener, & N. Schwarz (Eds.), *Well-being: The foundations of hedonic psychology*. New York: Russell Sage. pp.213-229.
- Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999). Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, **125**, 276-302.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, **47**, 180-190.
- 藤島寛・山田尚子・辻平治郎 (2005). 5因子性格検査短縮版 (FFPQ-50) の作成 パーソナリティ研究, **13**, 231-241.
- 福西勇夫 (1990). 日本版 General Health Questionnaire (GHQ) の cut-off point 心理臨床, **3**, 228-234.
- Goldberg, D. P. (1972). *The detection of psychiatric illness by questionnaire: A technique for the identification and assessment of non-psychiatric illness*. Oxford: Oxford University Press.
- 橋本博文 (2011). 相互協調性の自己維持メカニズム 実験社会心理学研究, **50**, 182-193.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **74**, 276-281.
- 黒川 潤 (1990). 円環モデルに基づく尺度 (和訳版) の標準化の試み—家族満足度, 親—青年期の子どものコミュニケーション, FACES III について— 家族心理学研究, **4**, 71-82.
- Lopez, S. J., Snyder, C. R., & Rasmussen, H. N. (2003). Striking a vital balance: Developing a complementary focus on human weakness and strength through positive psychological assessment. In S. J. Lopez & C. R. Snyder (Eds.), *Positive Psychological Assessment: A handbook of models and measures*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.3-20.
- Lucas, R. E., Diener, E., & Suh, E. (1996). Discriminant validity of well-being measures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 616-628.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and

- motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- McCrae, R. R., & Costa, P. T., Jr. (1991). Adding *liebe und arbeit*: The full five-factor model and well-being. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **17**, 227-232.
- 内閣府 (2008). 平成20年版国民生活白書—消費者市民社会への展望 ゆとりと成熟した社会構築に向けて—
<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h20/10_pdf/01_honpen/index.html>
- 内閣府 (2011). 幸福度に関する研究会報告—幸福度指標試案—
<http://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/pdf/koufukudosian_son01.pdf>
- 根建由美子・田上不二夫 (1995). 主観的幸福感に関する展望 カウンセリング研究, **28**, 203-211.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人 (2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, **71**, 241-246.
- 大野木裕明 (2004). 主要5因子性格検査3種類の相関的資料 パーソナリティ研究, **12**, 82-89.
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, **53**, 307-319.
- Pavot, W., & Diener, E. (1993). Review of the Satisfaction With Life Scale. *Psychological Assessment*, **5**, 164-172.
- 貞木隆志・榎野 潤・岡田弘司 (1992). 家族機能と精神的健康 心理臨床学研究, **10**, 74-79.
- Seligman, M. E. P., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology: An introduction. *American Psychologist*, **55**, 5-14.
- Steel, P., Schmidt, J., & Shultz, J. (2008). Refining the relationship between personality and subjective well-being. *Psychological Bulletin*, **134**, 138-161.
- 角野善司 (1994). 人生に対する満足尺度 (the Satisfaction With Life Scale [SWLS]) 日本語版作成の試み 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 192.
- 鈴木有美 (2009). 青年用主観的ウェルビーイング指標 (AISWB) の作成: 因子構造, 信頼性, および横断的検討 ヒューマン・ケア研究, **10**, 87-100.
- Tanaka, E., Sakamoto, S., Ono, Y., Fujihara, S., & Kitamura, T. (1998). Hopelessness in a community population: Factorial structure and psychosocial correlates. *Journal of Social Psychology*, **138**, 581-590.
- Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1063-1070.
- Wilson, W. (1967). Correlates of avowed happiness. *Psychological Bulletin*, **67**, 294-306.
- Wright, B. A., & Lopez, S. J. (2009). Widening the diagnostic focus: A case for including human strengths and environmental resources. In S. J. Lopez & C. R. Snyder (Eds.), *The Oxford handbook of positive psychology* (2nd ed.). Oxford: Oxford University Press. pp.71-87.
- 吉武清實・大島啓利・池田忠義・高野 明・山中淑江・杉江 征・岩田淳子・福盛英明・岡 昌之 (2010). 2009年度学生相談機関に関する調査報告 学生相談研究, **30**, 226-271.

脚注

註1) Subjective Well-Beingは, 研究が Wilson (1967) の主観的幸福感 (Avowed Happiness) のレビューに端を発しているためか“主観的幸福感”と訳されることが多い (例えば, 伊藤・相良・池田・川浦, 2003; 根建・田上, 1995)。しかし, Happiness との概念定義上の違いを考慮し (Steel, Schmidt, & Shultz, 2008参照), 本研究では鈴木 (2009) にならって“主観的ウェルビーイング”と表記する。

註2) これらのメタ分析における5因子は、Extraversion (外向性)、Neuroticism (神経症傾向)、Agreeableness (調和性)、Conscientiousness (誠実性)、Openness (開放性)と表されており、Costa & McCrae (1992)によるネオ人格目録改訂版(Revised NEO Personality Inventory: NEO PI-R)に準拠していることが見てとれる。ただし、NEO PI-Rの上述5因子は、本研究で用いたFFPQ版の外向性、情動性、愛着性、統制性、遊戯性にそれぞれ対応するため(大野木, 2004)、括弧付きで併記した。

を合計することにより尺度得点を算出することとした。

註3) SWBSとBHSについては、3回目調査対象者のうち別調査にて回答した242名分の結合データを分析対象とした。また、情緒的側面は1～2回目調査では測定していないため、AI-SWB記述統計量の算出および下位尺度間の相関分析には3回目調査以降のデータのみを使用した。

註4) GHQの選択肢は、「心配ごとがあつて、よく眠れないようなことは“まったくなかった・あまりなかった・あつた・たびたびあつた”」「いつもより容易に物ごとを決めることが“できた・いつもと変わらなかった・できなかった・まったくできなかった”」など各項目によって異なり、右へいくほどディストレス傾向が高いことを表す。得点化については、GHQ採点法(選択肢の左から0-0-1-1点)とLikert採点法(選択肢の左から0-1-2-3点など)があるが、本研究では精神疾患のスクリーニングを目的としていないため、尺度得点が高いほどディストレス傾向が高いことを表すよう選択肢の左から1-2-3-4点とした。

註5) BHSについては、Beck et al. (1974)が3因子構造、Tanaka et al. (1998)が2因子構造であるという因子分析結果を報告しているが、本研究のデータではいずれの場合も各因子を構成している項目が完全には一致しなかった。両研究では信頼性・妥当性の検討やその後の分析において全項目の合計点を用いているため、本研究においても全項目